
春一番が吹く頃

篠原悠哩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春一番が吹く頃

【Nコード】

N4856B

【作者名】

篠原悠哩

【あらすじ】

陰の支店長とまで言われるデキル美人OL名村彰子31歳独身。仕事は手厳しいが常に誰にでも公平なため、信頼は厚い。そんな彰子が唯一呼び捨てにしてかわいがるのは5歳年下のイケメン後輩・営業1課の一之瀬航。彼は2年前からなんだか彰子に懐いてきて、ついつい何かと面倒を見てしまう。今日も営業から戻ると彰子のもとへやってきた。先輩OLと後輩営業マンの切なくてホットなラブストーリー。

1# (前書き)

もうじき春がやってきます。

クリスマス以来2本目のシーズン物を書いてみました。

至らぬ点が多いとは存じますが、是非最後までお付き合いください。
最後に感想等いただければ幸いです。

県庁所在地都市の駅前メインストリート。

このエリアの一等地に立つビルのオフィススペースには大手の企業が名を連ねている。1フロアはおよそ300人ぐらいの人が常勤している会社も多い。

フロアの一番大きなメインオフィスは一面を大きな窓が占め、そこに映し出される景色は、遠くまで高層ビルが連なる都会のビルの群集で、映画やドラマでみるような大都会のビジネス街そのものだった。

まもなくPM7:00になろうとしていた。いつの間にか窓から見える景色は、街の灯りやネオンが美しい大都会の夜景へと変わっている。昼間はまばらにしか人が見えないただ広いメインオフィススペースに外出していた営業マンがぼつりぼつりと徐々に戻ってきていた。

ここはヘルス&ビューティ関連商材のメーカーが持つ販社である。取引先の多くは大手ドラッグチェーンや大手のスーパーチェーンで、これらの店は開店が遅く、営業時間が長い。したがって、担当者に会わなければいけない営業マンは、仕事がどうしても長引かざるを得ない。しかも、土日に仕事を残したくないために、週末といえど、これからの時間は社内人口が増えるのだ。昼間は人口が少なく、電話の音や話し声、FAX、PC、コピー機などOA機器の音がすみずみにまで響き渡るほど静かな空間と化す。日が暮れてようやく少しずつ活気を取り戻してくるのが日常だった。しかし、そのオフィスの奥の一角だけは、常々違う空気が流れていた。ここは経理部である。

「あっ！また！」

名村彰子なむらひょうしは、いつものようにリズムカルに書類の束に目を通していた時、その知的でやや広めの額を微妙に動かし、眉間にしわを寄せた。書類から目を離さずに自分のデスクにある電話に手を伸ばす。

「名村です。今よろしいですか。」

彰子は無表情に淡々と事務的に話を始める。

「昨日提出された経費清算書の件ですけど、これは何を購入されたんでしょうか。明細がないと清算できませんが。事務費といっても用途が広いですよ。加村さん、何度目でしょうか。・・・はい、・・・はい・・・、清算画面の備考欄ありますよね、そこに内容を記入してください。わかります?・・・。」

彰子は受話器を肩にはさみながら、書類を次々に目を通していく。

「・・・えっ?」

彰子がこめかみをピクッと動かして意志の強さがあらわれているような切れ長で形のいい目をぐっと見開いた。知的でクールな美しい顔に微笑みがなくなるとひどく凄みを増す。向かいの席でPCを打っていた田端美咲たはたみひさが一瞬空気が変化するのを察知して表情を曇らせ顔をこわばらせた。

「ちょっと、それじゃあ、費用項目違うじゃないですか!加村さん、何回目だと思ってるんですか。なんでも事務費で請求しないでください!それだったら、調査費でしょう?加村さん、もう一回費用項目のマニユアル見て正確に請求してください。今度やったら、支払いしませんよ!」

そう、啖呵を切ると受話器を置かずに荒っぽく右手を伸ばして回線を切ると、すぐにすごいスピードで内線番号をまわす。

「佐藤課長ですか。今、よろしいでしょうか。」

少し低い声で感情を抑えているが、口調は明らかに怒っている。

「加村さんの経費精算の件ですが、何度か説明させていただいてるのですが、また今回、本来なら調査費に当たるものの費用項目を適当にして事務費で清算しようとしてたんです。・・・はい、・・・はい・・・はっ?」

また、彰子の目が鋭く光って厳しく書類を睨んだかと思うと、声を荒げた。

「再三、課長にも申し上げたはずですが。内容を承認するのは課長なんですよ！サインしたあなたにこのツケがまわるんです。本社で発覚したらもつと大事なんですよ。今は内容を明確にしないと不正使用とも言われてしまうんです。何かあったら、あなたが責任を負わされるんですよ。いいですか、あなたは課長なんですから、その辺のこの重要性を理解してください!」

ガチャンッ!

啖呵をきった勢いで電話を置く。その音に向かいの田端はビクツとする。田端は今年入社したばかりの新人で、彰子が直接の上長となり、仕事内容を直接教わっている。

「名村主任、また、加村さんですか?」

やや引きつった感じで苦笑いしておずおず彰子に問いかける。

「ええ、何回言えばわかるのかしら。こっちも忙しいんだから、手を煩わせないで欲しいわよね。」

「いつそ、そのまま、本社の経理に送ってしまったてはいけないのですか？」

「そうね。でも、そうすると本人だけでなく承認した人の責任にもなるのよ。それに加村さんの場合、今日みたいな簡単な内容じゃないときが多々あるのよ。」

彰子はため息まじりで苦笑すると田端も頷いて合わせた。

「先輩、なんだかんだ言ってもやさしいんですね。」

そういつて彰子の傍から急に聞きなれた声が割り込む。

「一之瀬お帰り。今日早いじゃない。」

彰子がすぐ横に立つ背高な青年に振り返ると、営業1課のホープ、いちのせわたる一之瀬航が愛想のいい笑顔を浮かべて傍に立っていた。一之瀬は入社して4年目だが、頭が切れて仕事は速い。さらに機転も利くので顧客からの支持も多く、営業一課の主任候補の筆頭になっていた。そのうえ、学生時代にバイトで雑誌のモデルをしていたというだけあって、スタイルも抜群で美麗な顔立ちという恵まれた容貌も手伝って、社内外の女性にも絶大な人気を誇っていた。

彰子は会社の中で唯一この青年だけを呼び捨てにする。2年前の歓迎会以来、彰子に懐いてきて、なにかと面倒を見るようになって

現在に至るのだ。

「ええ、今日は週末ですからね、早めに切り上げようかと思って、昨日の晩に仕事詰めたんですよ。」

「へえ。ちょっとは成長してるじゃない。あ……、もしかしてデートなの？」

彰子がニヤニヤして聞くと一之瀬は脱力して苦笑いする。

「ん、なわけないでしょ？居たら彰子先輩のところに顔出さずにとっと帰りますよ。」

「なーんだ。一之瀬航に彼女ができたってトップニュースをメールで女子社員に打って帰ろうかと一瞬思ったのに。残念だね。」

「ちえ、彰子先輩ひでえの。俺の場合は、トップシークレット扱いですよ！勘弁してくださいよ。」

一之瀬は少しむくれ気味に負けじと言い返す。彰子はクスクス笑いながらPCの画面に向き直った。

「先輩まだ仕事するんですか？もう、7時ですよ。」

「あ、うん、これ、月曜の朝までに作成しておかないといけないから。」

そっぴいながら、キーボードの上を白くて細長い指が滑らかにすべり始める。一之瀬はその指をちらっと見ながらため息をついた。

「なんだ、まだ仕事があるのか。腹へったから、晩飯を先輩に付き合ってもらおうと思ったのに。」

一之瀬が少し寂しそうにぼそつとつぶやくようにいうと、彰子はPCを打ちながら一瞬ドキツとする。それでも、動揺を見せず、平然としてキーボードをひたすら打ち続ける。

「なんで、わたしなのよ。営業1課の人たちと行けばいいじゃない。若い女の子たちがいるでしょ？イケメンアイドルのあなたが誘えばみんな喜んでついてくるわよ。」

少し微笑みながら冗談ぼく牽制する。

「先輩、そんなつれないこと言わないでください。」

一之瀬がむくれて彰子を睨みつける。彰子はその様子をちらっと見ると噴出すように笑った。

「はいはい。わかりましたよ。なんか、話を聞いて欲しいってことね。あと10分ぐらい待ってくれる？キリがいいところで閉めるから。」

「え？いいんですか？」

一之瀬がうれしそうに満面の笑顔でたずねると、彰子は軽くため息をついてしかたないわねといった表情で微笑んだ。

「明日、午後こっちに用事があるからそのついでに少し寄るからいいわ。一之瀬のねえさんですもん、話ぐらい聞いてあげないとね。」

「さすがは、ねえさん、理解あるじゃないですか。じゃあ、休憩室で待ってますね。」

一之瀬がリズミカルに歩いて遠ざかっていく。その姿を見やっつて、ため息をもう一回ついた。

「名村先輩と一之瀬さん本当に仲がいいですね。うらやましいな。」

田端が少し頬を紅潮させて彰子に話しかけた。

「あら、そう言えば、ここにもファンがいたわね。」

彰子が苦笑いする。

「でも、主任と話をするときの一之瀬さんって別人みたいですね。いつもは、頼りがいがあつて骨太な感じですけど、なんだか主任と話をしている時は甘えっ子の弟つて感じ。でも、そんなところもかわいい。いいな。主任。やっぱり年上の特権ですか？」

「何言つてんの。いらんこと言つてないで、早く片付けて帰りなさい。」

彰子があきれたように田端をたしなめる。

「はい。じゃ、お先に失礼します。」

「語尾は伸ばさないの!」

じろつと彰子の目が光る。

「きゃあ〜っ！はい！お先に失礼します。」

田端は急にピシッとなって挨拶をし直す。

「はい。よし。やればできるじゃない。いつもそれくらいシャキッとしてなさいね。」

そういつてニッコリ笑った。

「お疲れ様。」

田端はほっとしたような顔をして笑顔で会釈をするとそそくさ帰っていった。彰子はキリのいいところまで入力がすませてPCの電源を落とした。貴重品をデスクの引き出しから出すとまだ残っているデスクまわりの人たちに挨拶をして足早にロッカールームへと向かった。

2# (前書き)

彰子はオフィスをみるとロッカーに寄ってコートとバックを掴み取り、休憩室に急いだ。

休憩室では、一之瀬が営業1課の女の子たちと雑談していた。この場合、声をかけると営業1課の女の子たちを敵にまわすんだよなとやや苦笑いをしながら、遠慮がちに一之瀬に声をかける。

「一之瀬くん、ちょっといいかしら？」

さも、仕事の用事があるかのようによそ行きの話し方で話しかけた。

「あ、彰子先輩。待ってたんですよ。」

彰子は、こらこらせっかく繕ったのに、おまえから墓穴掘るなよと思いつつ苦笑いする。彰子に振り向いている一之瀬の背後の女の子たちの視線が痛い。

「先輩帰りましょう。」

何事もなかったかのように普通に一之瀬は彰子に声をかける。

「え、もう帰っちゃうんですかあ？今から飲みに行きましょうよ。」

中でも、アイドル級のかわいい顔した今どきモテ系OL西倉にしくま絵梨が甘ったるい声で誘いをかけた。

「ごめん、今から先輩と食事がてら仕事の話で相談にのってもら
んだ。また、今度な。」

そういつて一之瀬は少し申し訳なさそうに丁重に断る。思わず女の
子たちに彰子もすまなそうな表情をするとなかなか意地の悪い目つ
きで睨まれた。一之瀬は能天気なのか当の本人はまったく気付いて
ない。一之瀬は女の子たちに挨拶をすると、彰子をとまってエレ
ベーターホールに歩き出した。彰子は少しため息をついて、あきら
めたように笑うと一之瀬についていった。

「あのさあ、もう少し気を遣えない？いいんだけどね、自分がどう
いう状況にいるかわかってる？」

「えっ？どういう意味ですか？」

一之瀬はとぼけているのか、天然なのか不思議そうに彰子の顔を上
から覗き込む。一之瀬は180センチで女としてはやや背高な彰子
を12センチ見下ろす。

「あなたのおかげで私は営業1課の子たちに随分と恨みをかったわ
よ。」

冗談ぽく笑いながら彰子は一之瀬に文句を言う。

「ああ、誘いを断ったこと？」

「そうじゃなくて、せっかく気を遣っていかにも用事があるように
つくろったのに一之瀬ったら、先輩待ってたんですよ、なんて暴露
しちゃったもんだから、あなたの背中でごわい顔してにらまれた
わよ。」

一之瀬はけらけら笑う。

「何言ってるんですか、この会社で彰子先輩程怖い人はいませんよ。なんせ、本社の社長に認められた陰の支店長ですもんね。」

「ちょっと、その言い方やめてよ。私は別にそんなんじゃないわ。」
眉間にしわを寄せて困った顔をする。

「そんな謙遜しないでくださいよ。この会社のお金の管理はすべて彰子先輩にかかっているようなもんですからね。彰子先輩がいないと成り立たない。知ってました？彰子先輩がいない日は何か事件がおこらないかとみんなひやひやしてるんですよ。よく休日でも、電話かかってくるでしょう?。」

「ちがうわよ、便利なだけでしょ?。」

彰子は苦笑いした。

地上に着くと、エレベーターホールを抜けて、メイン玄関から外へ出る。途端に刺すように冷たい空気がビル風とともに吹き付ける。

「寒っ!。」

一之瀬がコートの襟を両手でぎゅっと閉める。彰子はその様子を横目でちらっと見た。

「ふふふ、おなかすいてるからよ。でも、本当今夜は冷えるわね。」

雪降るかも。」

「そついやあ、毎年降るのに今年はちらついただけですね。過ごしやすけれど、変ですよね。」

「本当ね。でも、これから本格的に降ったりして。今夜あたり、帰るときにすっかり雪でおおわれて電車止まっています、なんてことになったりして。笑」

「そしたら、先輩、俺のマンションは地下鉄1本で先輩より近いですから泊めて差し上げますよ。」

「遠慮しときます。」

彰子は眉間にしわを寄せて一之瀬を見上げる。

「なんでですか？人が親切に寝床を提供しようつてのに。」

面白がってるのか、にやにやしながら一之瀬が彰子の視線をキャッチする。彰子は瞬間、ドキツとする。それでもできるだけ平静を装いながら苦笑いした。

「あのね、何考えてるの？いくらねえさんって言ったって、私は一応他人でさらに一応女なのよ。そんな事実がばれたら、私、会社の女の子たちに殺されるわよ。」

「俺がついてますよ。そんなことはさせませんって。」

一之瀬がクスクス笑いながら彰子に向かってウインクする。

「あほっ！余計こじれるわ。」

毎度毎度こんな調子で会話して、色気のある話なんてないのが日常だったが、彰子はこの関係がわりに気に入っていた。

会社のあるビルから歩いて程なく、一之瀬は最近注目の商業ビルにまっすぐはいっていく。

「ねえ、もしかして……。」

彰子の顔が緩む。一之瀬は少し口元で笑った。たどり着いたところは、ビストロ&カフェのお店だった。つい、先日このあたりに来たときにこの店の前を通り、雰囲気によさそうだったので彰子が行ってみたいとしきりに言っていたところだった。

「へえ、覚えていたのね。」

彰子は子供のような表情でうれしそうな顔を向けた。一之瀬はその様子をちらつと横目でみて少し照れたように笑って店の中に入った。

「一之瀬ですが。」

「はい、一之瀬様ですね。お待ちしております。」

そういうとウェイターが丁寧に一礼して店の奥へと案内していく。ウェイターは一番奥のテーブルで止まると、二人を招いて、椅子を勧めた。二人が席につくと、メニューを差し出してまた軽く一礼して遠ざかっていった。

「ぬかりないわね。いつの間に予約したの？」

彰子がニコニコしながらメニューを広げる。一之瀬に声をかける。一之瀬が笑っている。

「ほんと、そういうところソツないから、すぐ彼女でもできそうなの
にね。こんな週末にねえさんといっしょじゃなくなってかわいい彼女
とこれるようにしないとね。さみしすぎるわよ。」

「デートならしてますよ。今。」

そう本気とも冗談ともそれそうな感じで整った甘いマスクで彰子に
特級の笑顔を向けてくる。彰子はまた、一瞬ドキッとして目のやり
場に困る。それでも、年上風を吹かせて平然を装った。

「そんなこと言ってるから、女の子たちに恨まれるんじゃない。女
の恨みは恐ろしいんだから。」

そういつて頬を膨らました。一之瀬はクスクス笑っている。

「なに食べたいですか？彰子先輩。」

彰子は一之瀬から差し出されたメニューに目をやり、すぐにニッコ
リ笑った。

「もちろん、チーズフォンデュ。」

ひどく上機嫌な笑顔に一之瀬は噴出す。

「先輩、子供みたいですね。」

クスクス笑われて、彰子が真っ赤になる。

「なによ。いいじゃない。別に仕事じゃないんだから。」

「いや、いいですよ。仕事の時の厳しくソツがない先輩もいいですけど、こっちの顔もいいですよ。親近感が持てるから。」

「じゃ、仕事ときはなんなのよ。」

彰子がまた、口を尖らす。一之瀬はその顔を見てまた笑う。

「仕事のときの先輩に逆らせる人なんていませんよ。だれよりも支店のこと考えてて、間違ってる、損失になるとなれば、支店長だってしかりつけるんですから。」

「ちょっと、変なこといわないでよ。私はべつに……。」

彰子が困ったような顔をして言い訳しようとするが一之瀬がつつけて口を開いた。

「だから、誰からも信頼が厚いんじゃないですか。」

一之瀬が彰子を見てニッコリ笑うと彰子は小さくため息をついて苦笑いした。

3# (前書き)

読んでくださる皆様ありがとうございます。

先程のウェイターが再びやってきて注文をたずねると、一之瀬がいくつかメニューを指差しながら注文する。その様子を彰子はなんとなく眺めていた。一之瀬は彰子と話す時以外はひどく大人で、なんでもスマートにこなす。話の中身は確かに弟が姉に甘えてる図なのだが、よくよく考えてみると、いつもさりげなくエスコートされていた。物腰はソフトで上品で、その容貌はとても営業マンには見えない。いわゆるエレガントな男なのだ。

ウェイターが注文を確認すると、一之瀬が彰子に視線を返してくる。ぼんやりと一之瀬を見ていたので目が合って、はっとする。

「いい男でしょ？」

一之瀬がにんまり笑った。

「はっ？」

彰子は図星をさされて、ややうつろたえながらも強気で言い返す。

「何言ってるの？そういうのって自意識過剰って言うのよ。」

「ちえっ！見とれてくれてたかと思ったのに。」

残念そうに口を尖らせる。

「んなわけないでしょ。ナルシスくんって言われるわよ。」

彰子はしてやったりとクスクス笑った。

しばらくすると彰子には赤ワイン、一之瀬にはビールがグラスで運ばれてきた。

「おつかれさん」

グラスを軽く重ねると、ゴクゴクとおいしそうに一之瀬がビールをグラス半分ほど一気に飲んだ

「今日はすごい勢いね。」

「え？ああ、喉が乾いてたんです。この一週間は特に疲れたから。」

一之瀬が苦笑いする。

その間にカルパッチョやらサラダやら運ばれてきた。テーブルの脇に積んであった小皿を彰子が差し出す。

「ふふふ。慣れない？」

「たまらないですよ。今どきのやつは何考えてるんだか！」

一之瀬が眉間にしわをよせ、少しむっつとして言った。彰子はクスッと笑った。

「そうね、でも、ちょっと前まであなたもその口だったんじゃない？」

「ひどっ！彰子先輩。俺はあんな風じゃありませんでしたよ！」

一之瀬がムキになっていい返す。

一之瀬は先月から、季節はずれの新人を預かり、毎日営業に同行しているのだ。一之瀬は今回はじめて後輩を指導する機会をもったのだ。それが、なかなかの今どきの若者で、仕事に意欲的な一之瀬とは対照的な非常に受身のスタイルなため、何かにつけてイライラさせられるようだった。この1ヶ月、晩に事務所に帰ってくるとよく彰子にぼやいていた。

「今度は何があったの？」

彰子は穏かに微笑んで不機嫌そうにビールを飲み干す一之瀬に声をかけた。一之瀬はため息をつくと言をひらいた。

「そろそろ中本を独り立ちさせないといけないと思って、先週、商談の資料作らせようと時間かけて作り方を教えたんです。あいつ研修でやった基本的なことすらできないから、そこからもう一回教え直して・・・たいへんだったんですよ。それで、今週商談予定の一部をあいつにさせようと課題を与えたんですけど、その後うんともすんとも言ってこない。できたのかって聞いても、適当に濁すばかりで・・・。で、翌日商談日だからと出来るところまで見せてみるって言ったなら、なんにもやっつてなかったんですよ。もう、時間がないからその晩作りましたよ。」

「それで、中本くんはどんな様子だったの？」

彰子はワインを口に含んで穏かな顔で一之瀬の話を促した。

「一応、無然としながらも謝ってましたけど。」

彰子はそれを聞いてニッコリ笑った。

「ねえ、中本くんって研修の成績はどうだったの？」

一之瀬はえっ？という顔をして少し考えてから口を開く。

「確か・・・普通ぐらいですよ。特にによく出来たほうではないけど、悪くもなかったかな。」

「ふーん、じゃあ、まんざら馬鹿でもないじゃない。」

彰子が笑う。

「そりゃあそうですけど、でも、仕事やる気あるのかないのか、同行してても質問すらしてこない。一緒に居るのが結構つらいですよ。」

一之瀬は少し声を荒げてまた、新しく追加した2杯目のビールを勢いよく飲む。彰子はその様子に噴出してけらけら笑った。

「ふふふ。今まで仕事をなんでもスマートにこなしてきたあなたが苦労してるなんて、なんだかね、あなたも普通の人だったのね、なんだか親近感がもてるわ。」

一之瀬は怪訝な顔して訴える。

「先輩！笑い事じゃないですよ。こっちの身にもなってください。」

「はいはい、ごめんね。ねえ、中本くんはなぜこの会社に入ってたこともない営業の仕事をしようと思ったのかしら？聞いたことがある？」

「えっ？中本の？」

一之瀬が急に真面目な顔して彰子の顔を見る。

「そう、中本くんの人社動機。」

彰子も真面目に一之瀬を見つめる。

「そういえば・・・そんな話をしたことは・・・。」

「そうなんだ。じゃ、聞いてみたら？だって、うちだって適当な人材を採用するわけないもの。うちの人事の課長、人を見る目は真つ当よ。何か、彼に可能性があったのよ。これからひとり立ちっていふなら、特にそこを掘り下げておくことが大切じゃない？なんとなく、聞いてると彼の場合、業務内容のことがわからないんじゃないかと違ふところに問題がある気がするわ。うちの営業関連の研修は結構厳しいって聞いているから、よっぽど何かないと続かないはずだわ。それを乗り越えて来たのに、現場に来てやる気が見えないのは何か他のところにあるんじゃないかしら？このままだとこの先どれだけの知識・技術を教えても身になっていかない気がするわ。」

一之瀬はじつと手元のビールを見つめながら黙り込んだ。その様子に彰子がフォローしかける。

「ごめんなさい。部外者なのに偉そうなこと言って。気に障った？」

申し訳なさそうに彰子が一之瀬の顔色を伺う。一之瀬ははっとして顔を上げた。

「いえ、そうかもしれないって思って・・・。俺、何焦ってたんだ

る。同行が短いから一緒に居るうちにあれもこれも教えなきゃって思ってた……。もしかしたらひとりです空まわりしていたかもしれない。」

一之瀬はため息をついた。

「人を教えるってね、育てる方もものすごく成長させられるのよ。ほら、今の一之瀬みたいに。人って自分の思うようにならないでしょ？だから、考えるのよ。なんでっ？って。そうすると相手を理解しようとするでしょ？そのうち、どうすればいいかが見えてくる。でも、相手が違えばそのやり方ってすべて違うのよ。同じ人なんていない。だから、毎回苦悩する。難しいけど、人を育てるって面白いわよ。」

彰子は微笑みながら一之瀬に語りかける。一之瀬はじっと彰子を見つめて話を真顔で聞いていた。

「先輩にはかなわないな。なんでもお見通しで。いつも、何か話をするとなんか大事なことを教えてくれる。本当に尊敬しますよ。」

そういって、照れくさそうに笑った。

「ただの年の功よ。」

彰子が遠慮がちに笑った。

「ああ、それから、手厳しいようだけど、あなただから言うわ。あなたは頭がいいのよ。1つ何か言つとその先から周辺まで考え付くから理解が深い。だからおそらく仕事でも目的を考えて人が考え付かない先の先までふまえてくるんでしょうね。仕事を一緒にして

ないけど、いつも接していてそれぐらいのことは十分に想像できるわ。だけど、大事なのは多くの他人は違うってことなのよ。そこを認識しなさいね。あなたの仕事のレベルで考えないこと。こういう仕事はここまでやって当然とかこういうことはこうするものだからそれは高いレベルで仕事する人には当然だけど、そうじゃない人にとってはそこまで容易に気づけないのよ。だからって、仕事の質をさげろっていうんじゃないのよ。そこまで導くには人によって違うステップがあるのよ。そのステップはひとりひとり違うわ。」

一之瀬はじつと彰子の話に耳を傾けている。彰子は一之瀬の様子を見ながら言葉を選んで話を続けた。一之瀬はプライドが高い男だ。営業1課で一番仕事ができるだけに仕事には特に高いプライドをもっている。

「人を教えるってことはこれからのあなたの仕事の人生考えたら、絶対に避けて通れないことよ。だから、きつく感じるかもしれないけど、聞いてほしいの。それはね、自分のものさしで人をはからないようにつてことよ。」

真顔で話をしていた彰子の顔がふっと柔らかく微笑む。

「あなたは営業のエキスパートでしょ？お客様にはいろんな人がいらつしやるでしょ？同じことを同じ方法で伝えても決して同じようには伝わらない。それはあなたなら十分すぎるぐらいわかってるでしょ？そんな時、あなたならどうする？」

「えっ？そりゃあ、あの手この手で作戦を考えてアプローチして心を開いてもらってそれからその人に合ったやり方で攻略しますよ。」

一之瀬が少し自身ありげに答える。その様子に彰子はニッコリと笑

う。

「そうでしょ？それと同じよ。相手は人なんだから。まず相手の心を開くことじゃない？それから、中本くんのペースや内容にあわせて一緒に歩いてあげてよ。あなたは中本君の視点で今まで自分に見えなかったものがたくさん見えてくるわ。きっと後で中本君に感謝することになるわよ。」

一之瀬が一瞬驚いた顔をしてすぐに納得したように笑った。

「ねえ、先輩、ワインフルボトルにしちゃだめですか？」

一之瀬がいたずらっぽく見つめてくる。彰子は笑いながら頷いた。

「飲み過ぎないようにね。」

「大丈夫ですよ。先輩を送らないといけないから。」

「そうね、頼むわよ。ナイトさん。」

そういつて二人して笑った。そのあとは飲みながらおいしい料理に舌鼓をうち、ワインのボトルは空になり、最後は彰子がデザートまで2人分平らげた。

店をでて二人で駅に向かって徒歩5分の道のりをのんびり歩く。

「おいしかったわ。いい思いができたな。ありがとう、一之瀬。」

無邪気に彰子が一之瀬に声をかける。

「先輩、超甘党なくせして酒強すぎですよ。世の中おかしすぎ。なんでこんなに先輩にかなわないことばかりなんだろう？これじゃ男女逆ですよ。」

一之瀬は少々酔っ払いモードでくやしそうに彰子に噛み付く。

「だから、年の功だつて。」

彰子がクスクスわらう。

「年の功と酒の強さは関係ありません。」

一之瀬が口を尖らせて子供が喧嘩をするように言い返してきた。

「そうね、あなたは少々弱いわよね。」

さらにその様子を見ては笑う。

「ちがいます。普通です。フ・ツ・ウ。先輩が特別なんです。」

一之瀬が意地を張って言い返してくる。彰子はあきれた顔して笑った。

「はいはい、そうね、普通よね。」

彰子は酔っ払い相手に愛想笑いする。

「先輩、気持ちが悪くない。」

一之瀬が真面目に怒っている。本当にこんなところを見てると子供

みたいで、およそ会社で仕事してる姿からは想像できない。彰子は過去にいろいろ一之瀬の面倒を見る羽目になったことがあるが、それでも憎めないどころか、愛おしさすら感じる。この関係は楽しくもあつたが、彰子はいい加減にしないとたと自分戒めた。

「ありがとう、ここでいいわ。じゃ、また、月曜にね。おつかれさま。」

そういつて笑顔で手をふり、帰ろうとすると一之瀬が真面目な顔してひきとめる。

「彰子先輩……。」

彰子も立ち止まって真顔で一之瀬を振り返る。

「ありがとうございました。」

そういつて一之瀬は深々とお辞儀をして、もう一度彰子と目が合った時にはいつもの屈託のない笑顔で手を振った。彰子も笑顔でそれに答えた。

月曜の朝、彰子は少し早く出社して朝から、すごい勢いで請求書や顧客の入金状況を確認してはつきつきと滑らかなキーボードさばきで処理をしている。そこへ、田端が出社してきた。

「おはようございます。名村主任、早いですね。」

田端はぺこつと頭を下げると彰子の前の席に収まる。

「ああ、おはよう。すぐ月末でしょ。2月はほら日数短いから、今日あたりから追いつけないと。ああ、それから、来て早々悪いけど、月初にやった市場検のあとの懇親会の請求書あがって来てる？金額大きいから来月にまわしたくないからって20日までに請求書あげてもらおうようにお願いしておいたのだけど。」

「あつ！そう言えば！」

一瞬はつと口を開けてすまなそうに頭を下げる。

「申し訳ございません。まだです。先週忙しかったんで忘れてしまいました。すぐに確認します。」

彰子はその返事に表情を変えて、一旦手をとめて田端の顔を見て言った。

「田端さん、あなたはこここのところ仕事をよく覚えてくれたから本当に間に合うようになったわ。仕事ひとつひとつは気も利いてるし、よく出来るようになってるわ。でも、仕事の組み立てがまだまだ甘

いわね。目の前のことで振り回されやすいわ。優先順位をつけて取り組むことを忘れないで。今ある仕事で何が重要で期限の早いものはどれなのか、その日しか出来ない仕事は何？とかね、考えて仕事の順番やその日の段取りをつけるのよ。そろそろ自分が任された仕事は、期限までに責任持って仕事ができるようにやりくりを覚えましょうね。あなたはもうすぐ一年であと2ヶ月もすれば先輩になるわ。」

田端は意気消沈している。その表情を見ながら彰子が続ける。

「なんで厳しくいうかというかね、あなたはわかる人だからよ。あなたは頭がいいわ。だから、私も当てにしているのよ。実際ほんとにこの一年助けてもらったもの。田端さん、いい？うちはお金を扱う大事な仕事をしているのよ。信頼は人でつくられるけど、信用はお金でつくられるのよ。どんなにいい人でもお金の払いが悪いと信用できないでしょ？だから、会社の信用を損なわないようにきっちりしないとね。私たちは営業じゃないけど、お金を正確に扱うことで、会社の信用を作ってるのよ。その自覚は忘れないでね。」

「はい。」

田端が緊張した顔で返事をする。

「わかればよし。じゃ、今日も一日がんばりましょう。」

彰子がつこり笑って、ハッパをかける。

「はい。がんばります。」

田端もほっとして少し笑うと元気よく返事をしてPCに向かった。

彰子はその様子を見届けるとまたPCの画面に目を向ける。

しばらくして、ピクッと彰子のやや長めの眉が引きあがった。彰子は顧客の支払い状況一覧をみて、さらに検索を何度か試みてじつと画面を眺めると、画面から目を離さずに左手を伸ばして受話器をとると内線番号をまわした。

「支店長、お話が。」

そついうと開いていたウィンドウを隠し、会議室の空き状況ををすばやく検索する。

「3号の会議室が開いていますので、来ていただけませんか、お時間はとらせません。重要な内容です。」

彰子は顔をこわばらせて、電話を切るとすぐに3号の会議室へと急ぐ。会議室にくとPCを立ち上げ先ほど自分が見ていた画面を開けて、支店長を待った。

ほどなくして、ノックの音が聞こえて支店長がやってきた。年の頃は50すぎで背は彰子とあまりかわらないが、やや恰幅がよく、堂々として存在感がある。いかにも重役といった風貌である。もともと企画系で数字に関しては頭のきれいなインテリタイプだった。

「名村君、おはよう。どんな用件かね。」

営業スマイルで挨拶をしてきたが、彰子がお辞儀しただけで声を発しなかったたので、ただならぬ雰囲気支店長も気付き、急にピリツとした顔つきになる。

「あの、SKドラッグ様の件なんですけど、ここ数ヶ月支払いに遅れがあることはお耳にいれたおと思いますが、先月から支払いが滞っ

てます。今月もいまだにありません。再三あちらには請求をしたのですが、返事はしてくださるのですが、その後の支払いが一向にありません。少しあやしいんですけど……。以前も同じようなことがありました。支店長はまだこちらにいらしてないときです。ご存知ないと思いますが、大手のスーパーチェーンロウハンのときに同じ兆候が出てたんです。SKドラッグ様といえばこちらの地元基盤の強力ローカルチェーンですが、以前は有力店でしたが、最近では全国展開している大手のドラッグチェーンの積極的な進出によってここ数年はかなり苦戦していると聞いてます。そういうことも考えますととても気になるのですが……。」

「ふむ…たしかにその通りだ、ここところ、SKの一番店ですらここところ客数目減りで売り上げきつくなってきたな。この間、店にお邪魔したときには閑散としていて、以前の勢いも感じられなかった。」

支店長はPCの画面に目をやりながら、渋い顔をしてじっと考えていた。

「名村君、すまないが、営業部の片岡部長を呼んでくれないか。」

「はい、かしこまりました。」

緊張した面持ちで返事をして一礼すると、速やかに彰子は会議室の片隅にある内線電話で片岡部長を呼び出した。

「ありがとう、君はもういいよ。戻りたまえ。」

「はい。」

彰子はもう一度一礼すると会議室を出て行った。

その後の展開は速かった。支店長命令でSKドラッグ本部担当のマネジャーから各店担当の営業まで全員店に行かせて店の動向と情報集めに奔走した。彰子は彰子で自社のグループ企業の経理関連部署に問い合わせSKドラッグの支払い状況を確認した。その結果、彰子の所で把握したものとほぼ同じような状況だった。支店長にその情報も伝えると、その日の夜はものものしく緊急対策会議になった。

2時間ばかり話をやりとりしていたかと思うと支店長が一旦会議室から出てきて社長に電話していた。そのやりとりは、かなり辛らつな感じだった。

「…はい、…はい。やはりですか…。まずいですね。わかりました。本部担当から指示させて、とりあえず、理由をつけて一部商品を返品させる指示を出させます。それから発注が上がってきても出荷停止にします。万が一、入金があつた場合はあつた分に相当する金額分の出荷とします。…はい、…はい、そのように物流に指示します。…はい、…はい。わかりました。損失をなるべく最小限にできるよう努力します。」

どうやら本社で調べた結果、SKドラッグはかなりまずいギリギリのところまでできていて、いつ倒産してもおかしくない状況になっていたことが判明した。社長の電話の後、支店長から厳しい話がなされて緊迫した面持ちで再度全員店に出かけていった。

もちろん、一之瀬も担当店にSKドラッグがあつたので自分の担当店に中本を伴って出かけていった。あつという間の一日だった。朝から、不穏なデータを見つけたところからはじまってこんな大事になつてしまった。彰子は一抔の不安を覚えながら、PM10:0

0に退社した。

ことが起こったのは翌日の朝のことだった。

次の日、彰子は早めの出勤をした。

朝のニュースでSKドラッグの倒産を知った。それであわてて出社したのだ。案の定、会社には既に幹部が全員そろっていて物々しい雰囲気につつまれていた。みんなあまりの急展開に全員驚きつつも、取引先からの電話応対に追われていた。

「昨日、どのくらい返品取れたんだ？被害額はいくらだ？」

支店長が声を荒げて片岡部長に迫っている。

「はい、一部返品がきれなかったところを除いてはおおよそ2割ぐらいは回収できたかと思えます。あとは無理でした。被害額はまだわかりません。」

ふと支店長と彰子の目があった。

「名村くん、ちょっといいかな。」

すぐに彰子が返事をして支店長のデスクに駆けつける。

「昨日はご苦労だったね、君が見つけてくれなかったらもっと大きな被害額を出していたところだ。取引金額が大きいところだから2割でも回収できてよかったよ。」

「はい……。そうですか……。大変なことになりましたね。」

彰子は険しい顔をして頷いた。

「すまないが、損失がどのくらい返品の金額がわかり次第教えてくれないか？」

支店長には疲れがみえる。昨夜遅くまで仕事していた上、早朝から呼びだされたのだろう。

「はい、かしこまりました。」

そういつて一礼すると彰子は自分のデスクに戻っていった。

「しかたないな。ご苦労だった。あとはどこのチェインが引き受けるかだな。負債額がどのくらいかはまだ詳細がわからないが、SKドラッグの展開している場所はこの地元じゃかなりおいしいエリアだからな、どこかが喰らいついてくるはずだ。」

支店長は傍にいた疲れの色の見える片岡部長をねぎらった。

昨晚、営業担当者は全員一晩中店を張っていた。朝になると、従業員は朝のニュースで倒産の事実をしたらしくあわてて店に出勤したものがほとんどだった。それだけでも、現場は相当混乱しているようだった。

ふと彰子はフロアを見渡した。一之瀬の顔は見えない。おそらく営業担当店にはりついているのだろう。眠ってないんだろうなと思うと心配だった。彰子は携帯を取り出し、一之瀬に短いメールをいれると、すぐにPCの画面にはりついた。

数日間この混乱は続いていたが、週の半ばになるといち早く、まだこのエリアに進出していない全国でナンバー2のドラッグチェー

ンのエルドラッグが名乗りを上げ、負債額、従業員、店舗を含めてすべて引き受けることを決定した。彰子の所属する支店とは取引がなかったが、他支店とはもともと取引があるので、スムーズに引き継ぎが出来た。それで、なんとか混乱は収まったのだった。

その週の金曜日、PM 8：00 になって一之瀬が帰ってきた。いつもは彰子のデスクにやってくるのだが、疲れきっているのか、自分のデスクにたどり着くと体を重そうにして椅子にどっかり座ったのが見えた。彰子は、その様子を見て携帯にメールを打った。営業1課のデスクは彰子たちの島とはかなり離れていて反対の端に近い辺りにある。

『おつかれさん。大分くたばってるみたいね。』

『あー、彰子先輩????女神様みたいだ〜!』

彰子は帰ってきたメールを見てプツと噴出す。男のクセに結構絵文字が多い。やはり、今どきの若者じゃない。そう思いながら返事を返した。

『何あほなこといつてるのよ。仕事一段落ついた? 帰りに軽くご飯でもどう? 早く帰って寝たほうがいいわよ。色男が台無しよ。』

『俺はどんな時でも色男だから心配くださなくても大丈夫です。もう、仕事する気力ないですから、すぐにでも出られます。彰子先輩は?』

『今、PC閉じてるとい。じゃ、休憩室でね。』

『了解』

彰子がコートとバックをもって休憩室にやってくると、一之瀬が疲れたように椅子にすわって机に顔を突っ伏していた。

「おまたせ。寝てるの？」

返事がない。本当に寝てるのだろうか。これまでのめまぐるしい状況を考えると寝かせておいてやりたい気もした。でも、一之瀬のマンションは会社から近い。ちょっと無理して帰って寝たほうがゆっくり眠れると思いい直して、背中を軽く叩いた。

「ねえ、一之瀬、起きなさいよ。ここじゃ風邪引くわ。」

それでも、返事がない。彰子はため息をついてもう一度一之瀬の耳の傍で声をかけた。

「一之瀬、起きて。いちのっ……!」

不意に腕を掴まれて引き寄せられる。一之瀬の顔が息がかかりそうなくらい近くにあった。彰子は驚いて心臓が跳ね上がった。

「ふふん。寝てると思った？」

ふてぶてしく一之瀬がにんまり笑う。彰子は一之瀬の腕からとっさにのがれた。

「ちょっと!何すんのよ。驚くじゃない。人が親切に起こしてあげれば……。もう、心配してやったのが馬鹿みたいじゃない。」

そういつて彰子が口を尖らせた。

「あはははは・・・ごめんごめん。先輩。つい、久しぶりだからかまいたくなっちゃって。」

「あのね、私はあなたのペットじゃないんだけど？」

彰子がむっとしてじろっと一之瀬を睨む。

「まあまあ、先輩、早くいきましようよ。俺腹減っちゃって」

彰子はまだ少し怒っていたが、無邪気に笑う一之瀬につられて笑ってしまった。休憩室を出て、一之瀬はエレベーターホールでボタンを押すとその背中に彰子が声をかける。

「どこに行く？ガッツリ系？あつさり系？」

「先輩さえ良かったら、ガッツリ系。」

「了解、ガッツリ系OKよ。でも、飲みはやめようね。一之瀬疲れてるから。早く帰って寝るのよ。」

「え？せっかくの金曜日は何いってるんですか。飲みにきまってるじゃないですか」

彰子は一之瀬の調子よさに軽く脱力感を覚えたが、軽くため息をついて笑った。

「わかったわ。でも、あんまり飲むんじゃないわよ。あなた、よ・わ・い・ん・だ・か・ら。」

「違いますっ！普通です！先輩が強すぎなんですっつてばー！」

一之瀬がムキになって言い返す。

「そうだったかしら」

彰子はふふんと笑いながら扉の開いたエレベーターに乗り込んだ。

6 # (前書き)

ここから、物語が動きます。

ガッツリ系ということで彰子の発案により、韓国料理屋の一角で二人はうつすら生成りの白い液体を目の前にして観察している。

「おおっ！これがマッコリかあ。初めて拝みますよ」

「いいけど、ほんとうに大丈夫？日本酒並みよ。あと壊れても知らないわよ。」

「ええ、そんな冷たいこといわないでくださいよ。住所教えますから、送ってくださいね」

彰子はドキつとした。実は住所なんかきかなくても、一之瀬のマンションを知っているのだ。2年前の新人の歓迎会の時に酔っ払った一之瀬が間違えて彰子のタクシーに乗りこんできてそのまま眠ってしまったのである。その時、なんとか一之瀬が持っていた手帳で住所を調べて送り届けたのだ。

「あほか、遠回りになるじゃない！」

彰子が簡抜いれずにつっこむ。

「いいじゃないですか、泊まっていけば」

一之瀬はリズムカルに軽いノリで答える。

「あのねえっ！」

彰子がムキになって怒っていると一之瀬はニッコリ笑って彰子を見た。

「はやく飲みましょう、先輩。」

一之瀬のまったく気にしていない様子に彰子は脱力した。

「はいはい。飲みましょうね。」

仕方なく彰子が応じる。

「おつかれさーん」

二人で声を揃えてグラスを軽く重ねると、珍しそうにマツコリを口にした。

「へえ、おいしいですね。なんか、甘酒っぽい。」

「油断すると来るわよ。さあ、食べよう！プルコギ焼けてるよん。」

「おお、いいにおい、そそるねえ。」

そういいながら、いつもなら仕事の話もでてくるのに今日は終始料理の話で盛り上がった。最後は石焼ビビンバで二人は最高に盛り上がって笑った。それから、どうしても一之瀬が飲みたいというので一之瀬に案内されてバーに一軒立ち寄った。

そこは、さほど暗くもなく、落ち着いた雰囲気だ。人の話し声も結構聞こえるため、妙に緊張しなくてもいいところだった。カウンター
の奥に席を取り、一之瀬はジントニツク、彰子はギムレットを頼ん

だ。

彰子はバーテンダーから差し出されたこぼれそうなぐらい一杯になったグラスをそおっと寄せて口へ運ぶ。一口含むとすっぱくて口の中がすつきりとして気持ちいい。上機嫌でにっこりわらうとその様子をじっと面白そうに眺めていた一之瀬に話しかけた。

「こんな店も来るんだ。」

少し、上目遣いでちらっと一之瀬を見る。一之瀬はふっと目を細めて答えた。

「たまにですよ。」

「ひとりで?」

彰子は子供みtainな目で不思議そうに一之瀬をじっと見る。

「そこをつっこむか。」

一之瀬が照れたように笑う。

「あ、ふられた前の彼女と来たとか。」

急に一之瀬が嘔出す。

「ぶっ!ちっ違いますよ。前の彼女は飲みませんでしたから、って、なんで前の彼女にふられたこと知ってるんですか!」

「カンだってば!やっぱりふられたんだ。ごめんね、凶星だったの

彰子はその話を聞いてひどく悲しそうな顔をしたので、かえって一之瀬のほうが恐縮してしまった。

「大丈夫ですって、先輩そんな顔しないでくださいよ。ずいぶん前の話ですから。」

一之瀬が逆に必死にフォローするが、彰子の顔は曇ったままだった。

「ごめんなさい。嫌なこと聞いちゃったわね。」

彰子が申し訳なさそうに低い声で言う。

「大丈夫ですって。」

一之瀬はそうやって軽く流そうとしたものの、彰子は切なそうにその視線をグラスに落とす。なぜか一之瀬はその時、彰子の姿があまりにも寂しそうに感じて一瞬声がかげられなかった。

それから会話も途絶え、二人はだまって飲んだ。一之瀬は彰子と一緒にいて、こんなに会話がないのははじめてだった。なぜか話しかけてはいけない気がしたのだ。どこか様子が違う彰子が気になりつつもグラスを口に運んだ。

「もう、帰ろうか。一之瀬。」

少し寂しげな表情で笑いながら彰子が声をかけてきた。

一之瀬は黙って頷いた。

店を出ると彰子がタクシーを停める。

「一之瀬、大分飲んでるから、タクシーでかえりなさいよ。どうせワンメーターぐらいでしょ?」

「さすが、気が利きますね、彰子先輩。」

そう言つて、タクシーが近づいてくると彰子をそのまま車に押し込んで自分も乗り込んだ。

「ちょっと!なんで私まで乗ってるのよ。」

「池上町まで。」

彰子の言葉を無視して行き先を告げると彰子の方にもたれてすやすや眠りはじめた。

「ちょっと、一之瀬!」

寝息だけで、返事がない。彰子は仕方なく、ため息をつくと諦めたように窓の外を見た。あの時もこんな風に眠ってしまったら困らせた。あの後部屋まで送り届けたときに振られた彼女と間違えられて、手を握られて泣かれてしまった。もう、あれから2年も経つのだ。目的地に近いところまで来ると、眠っている一之瀬のかわりにマンションを案内して、目の前に停めてもらった。

「ちょっと、起きてよ!着いたわよ。」

一之瀬が、ぼんやり目を開ける。

「あ、ほんとだ!なんで俺の家がわかつたんですか?」

酔っ払ってややるれつがまわらないしゃべりで彰子に尋ねる。彰子はどきつとするが、あなたが自分で説明してたわよとごまかして一之瀬に降りるように促した。一之瀬は重い体を無理やり起こしてタクシーを降りると、また、マンションの中に彰子を強引に引っ張っていく。

「ちょっと、離しなさいよ、一之瀬。」

一之瀬は上機嫌で彰子の声に耳をかさない。一之瀬は彰子の腕を掴んだまま、エレベーターを経由し、3階の自分の部屋の前に立つ。ポケットの中を探って鍵を取り出すと何度か失敗してようやく鍵穴に納め手扉を開けた。そして、彰子をひっぱりこんでドアをしめると、一之瀬は彰子を抱き寄せた。彰子は心臓が止まりそうなくらい驚いた。

「ちょっと、一之瀬、何やってんのよ。離しなさいよ。一之瀬！」
彰子が一之瀬の身体を腕で押しやるうとするが、一之瀬はさらに強く抱きしめる。一之瀬の広い胸に彰子がすっぽりと納まっている。彰子はどきどきして少し酔いがまわってきたようにクラツとした。

「彰子先輩、ここへ来るの2回目でしょ？」

「えっ？」

耳元で一之瀬が落ち着いたしっかりとした声で話す。さっきの酔っ払いではない。どうやら、正気のようにだった。

「ほら、2年前、新人歓迎会で俺が飲みすぎた時ですよ。あなたが、ここまで送ってくれたんでしょ？」

「……。」

彰子ははっとしたがそのまま黙っていた。

「あの時は誰だかわからなかった。でも、あの時からその女性のこと忘れられなくて探してたんです。そしたらある時、同じ声で同じ香の人を見つけたんです。それが、彰子先輩でした。」

彰子はとっさに逃げようとしたが、瞬間、一之瀬の強い力で押さえつけられた。

「すごく綺麗で頭のいい人で仕事ができ、俺、本当眩暈がした。それから、彰子先輩に追いつきたくて必死に仕事して……。俺、彰子先輩に認めて欲しかった。マネージャーや部長よりも彰子先輩に……。」

そういつてぐつと抱きしめる手を強める。彰子は心臓の音だけが体中に響いているみたいで全身が体の奥から熱くなる。彰子は目を閉じてじつと耐えるような表情をすると次の瞬間、目を開けて一之瀬の手を解こうとした。

「彰子先輩、好きです……。」

彰子は一瞬、息が止まるかと思った。そうして、彰子は体の力がすつと抜けていった。一之瀬が腕を解いて彰子の顔を見おろすと彰子は涙を流していた。

「なぜ……？泣いているんですか？」

一之瀬が彰子の頬を包むように触れる。彰子はゆっくり目を閉じる。

「わからない……、でも……。」

一之瀬が唇を近づけようとすると、彰子が瞬間一之瀬の体をすり抜けた。そして、寂しく悲しそうな目をしてじっと一之瀬を見た。

「ごめんなさい……。私があなたを深入りさせてしまったわね……。ごめ……。あなたは、私みたいな年上の女じゃなくて、もっと若くてあなたに似合うような子を探して……。それに私……。そんな資格ない……。ごめんなさい……。」

「彰子先輩？年なんて関係ないですよ。俺は、彰子先輩が好きなんだ。彰子先輩じゃないとだめなんだ。この一週間だって、SKドラッグの件でひどくめいつていたとき、いつもメールで励ましてくれて……。今日だって……。俺、どんなにうれしかったかわかりますか？どんなときでも、あなたさえいれば俺はなんでも出来るし、元気になれるんですよ。」

「……。でも、ごめんなさい……。私……。ダメ……。お願い……。許して……。」

しぼりだすようにつまりながらそう言うと、急にドアを開けて外に駆け出した。一之瀬はその後慌ててを追いかける。彰子は後ろも振り向かず走って、大通りに出るとタクシーを拾って走り去ってしまった。一之瀬はその場に取り残されて呆然とした。

7# (前書き)

今回ちょっと山場なので長めです。少しだけ性描写有です。そういうシーンは初めてトライしたので、何度か書き直してしまいました。

また、書き直すかもしれませんが・・・。

描いていてテレまくりです。修業が足りませんね。笑
是非お付き合いください。

月曜の朝、一之瀬が出社すると既に彰子は出社している、いつものように難しい顔をしてPCの画面とにらめっこしていた。今日は会議で外に営業には出ない。普段は休憩のたびに声を掛け合うのだが、今日は一度も目をあわさない。平然としているようで、彰子は明らかに一之瀬を避けていた。

PM7:00になると彰子は早々にPCの電源を落として帰ろうとロッカールームに向かった。部屋に入ると、同期の三枝玲子さへくされいこがいた。

「おつかれっ！今日早いじゃない。」

「うん、先週つめたからね、今週は帰れる日は帰ろうと思って。」

少し疲れ気味なのか、愛想笑いで答えた。その様子を汲み取ってか、同情したように三枝が声をかける。

「そうよね、先週はたいへんだったわね。彰子が始めに気付いたんでしょ？ほんと、あんたはすごいわ。」

「そんなこと……。たまたまよ。」

「ううん、あんたは、本当にすごいよ。私も尊敬するもん。」

そんな会話をしながら、いつもの調子で彰子がロッカーの扉を開けた。その瞬間、固まった。自分のバックの中身が引き裂かれてロッカーの中に散らかっている。彰子はそれを見るなり頭が真っ白に

なった。彰子が呆然と立ち尽くしていると、様子が変なことに気付いた三枝がロッカーの中を覗きこんだ。

「ちょっと！何、これ？」

彰子は三枝の声に驚いてロッカーの扉を慌てて閉める。

「ちょっと、見せなさいよ、彰子、これ、あんだ、嫌がらせじゃない！」

三枝が閉じられたロッカーを強引にこじ開ける。

彰子はその横で呆然としていた。そして、大切なものが引き裂かれているのに気付いたときにはフラッと倒れそうになってロッカーに体をぶつけた。

「彰子！」

三枝がとっさに彰子の腕を掴みかろうじて支えた。三枝はロッカーの前にあるベンチにとりあえず彰子をすわらせると、彰子の様子を伺いながら、ロッカーの中を確認してみた。三枝は散らばる写真の残骸に気付いた。

「彰子、これっ！恭二さんの……。」

彰子は既にに放心状態だった。どこを見ているのか、彰子の視線は一点を見つめている。そのうち、涙が頬を伝った。

「彰子、しっかりして！あんたらしくくないよ！彰子！」

三枝は彰子の様子が尋常じゃないことを悟り、どうしていいのかわからない瞬間になる。少しすると三枝は、はっとして彰子に声をかけた。

「ちょっと待ってて、彰子、すぐ戻ってくるから、ここを動かないでよ。」

そういつて三枝は足早にロッカールームを出て行った。

三枝は事務所にもどって、一之瀬の姿を見つけるとつかつか近寄っていった。一之瀬は鈴原主任を打ち合わせをしている。

「一之瀬君、ちょっといいかしら？」

一之瀬はその声に振り向くと人事の三枝がすごい形相で立っていた。一之瀬は驚いた顔をしている。

「何ですか？」

「とにかく今すぐに来て。急用なの。」

「え、でも、俺今打ち合わせ……。」

「そんなことより、とにかく緊急なの。鈴原主任、一之瀬君、緊急に用事があるので連れて行っていいですか？この打ち合わせ、明日でもいいですよー！」

三枝は鈴原に有無をいわせない勢いで睨みつけ、一之瀬の腕を強引に引っ張った。

「あ、はい……。いいです。」

あまりの迫力に鈴原も頷かざるをえず、一之瀬を引つ張っていく後ろ姿を呆然と見ていた。

「なんですか、三枝さん、緊急つて。俺、仕事あるんですけど。」

休憩室に着くと、三枝は勢いよく振り返った。

「何言つてんの、あんた、彰子より仕事のほうが大切なの？」

三枝の言葉に一之瀬の端正で綺麗な顔が一瞬こわばり、眉をしかめる。

「彰子さんに何かあつたんですか？」

「いい？一之瀬君、ひとつ質問するけど、あんた、彰子のこと好きなんでしょ？」

「はっ？」

唐突に聞かれて一瞬一之瀬は戸惑う。

「いいから答えなさい。そうじゃないと教えられないわ。」

じつと三枝が一之瀬を真剣に見つめて詰め寄る。少しの沈黙があつて一之瀬は深呼吸した。そして三枝の目を見て真顔で言った。

「俺は彰子先輩が好きですよ、彰子先輩じゃないとだめです。俺が好きなのは2年前から」

あの人だけです。」

一之瀬がそう言い切ると、三枝は一瞬にこつと笑って、すぐに真顔になる。

「彰子がね、ロッカー荒らされたの。嫌がらせよ。言いたかないけど、おそらくあんたのファンよ。」

「えっ？」

一之瀬は驚いて立ち上がった。それを三枝が制して座らせる。

「ちよつと、慌てないで。それぐらいいたしたことはないの。前にもちよこちよこあつたから。でもね、今度は違うの。やられ方が問題なのよ。大切な人の写真をスタスタにされていたのよ。」

一之瀬が眉をしかめる。

「大切な人の写真？」

三枝がが大きく頷く。

「いい、一之瀬君、この話をしつかり聞くのよ。彰子はね、3年前に婚約者を事故で亡くしてるのよ。しかも目の前でトラックにはねられて即死だったの。それから、しばらく会社を休んでたわ。私お見舞いに行っただけど、なんて声をかけていいのかわからないぐらい衰弱していてね、私の所為だって呪文のように言って泣いていたのよ。今みたいに復帰できたのは奇跡なくらいだわ。」

一之瀬は三枝の話に驚いたような顔してじつと聞き入っていた。

「いい？聞いてる？一之瀬君。君ね、彰子を好きになるってことは、彰子のすべてを受け入れられないとだめよ。あの子は決してそのことを忘れない。忘れてないのよ。現に今だって、ロッカールームで放心状態になってるわ。」

「えっ？」

三枝のその一言に一之瀬は立ち上がって、ロッカールームに走った。ノックをして、開ける。たまたま、そこには他に誰もいない。それを確認すると一之瀬はすばやく中へ入った。部屋の奥のロッカーの前に立ち尽くす人影が見える。間違いなく、彰子だった。彰子は何かを掴んでそれを見下ろして泣いていた。

「彰子先輩！」

彰子のはっとして顔を上げた。

「一之瀬……。」

彰子が涙を手でぬぐおうとするが、後から後から涙が流れてくる。一之瀬はとっさに彰子を抱き寄せる。

「彰子先輩、我慢しないで。泣いていいんです。俺の前で強がらないで。」

彰子は何のことを言っているかわかったようで一瞬はつとしたが、一之瀬の胸に身を任せて今度は声を上げて泣いた。一之瀬は彰子の身体をしっかりと抱きしめてすっぽりと彰子の頭を胸に収めた。

しばらくして、彰子にコートを着せて写真の残骸を拾い集めてバ

ツクに入れるとロツカールームを出た。入口では三枝が待っていて、人を入れないようにしてくれていた。一之瀬は三枝に一礼すると、エレベーターホールに彰子をとともに消えた。外へ出ると一之瀬は、タクシーに乗り込み、自分のマンションへと向かった。その間、一之瀬は憔悴した彰子の肩を抱いて、しっかりと支えた。

一之瀬はマンションに着くと、彰子をソファに座らせてその横に自分も座った。

「先輩、大丈夫ですか？」

彰子は黙って頷く。

「なぜ言ってくれなかったんですか？俺のために嫌がらせされてるって……。」

彰子は一之瀬の目を弱々しくしばらく見つめるとぼそっと口を開いた。

「べつに、そんなことたいしたことじゃないもの。」

「彰子先輩！なんでそんなに強がるんですか。あなたはそんなんじゃないでしょう？本当は繊細で弱くて誰よりも寂しがり屋……でしょう？」

彰子は何か物言いたげにじっと一之瀬を見ていたが、そのまま口を開かずにと床に視線を落とす。

「俺は……、あなたはあの日、俺が前の彼女と勘違いして泣いていたのを知ってるんでしょう？あなたは俺の手を握りながら涙を流

してた……。そんな俺を見捨てて帰れなかったから、寝付くまで傍にいて手を握っていてくれたんでしよう？俺、途中から彼女じゃないことぐらいわかってましたよ。それでもいいと思った。でも、朝目覚めたら、あなたは居なくなってた。俺はあの日から、あなたのことが好きで好きでどうしようもなく……。どうしても一度会いたくて……。探したんですよ。そして俺の前に現れた人は驚くほど美人で聡明で……。これ以上ないぐらい魅力的な人だった。」

彰子は床の一点を見つめたまま一之瀬の話をじっと黙って聞いていく。

「先輩、つらい思い出かもしれないけど、よかつたら俺に話してくれませんか。先輩のこと本当に好きなんです。だから、悲しみも苦しみもすべて先輩のことは受け入れたいんです。いろいろなことがあつた今のあなただから俺は好きになつたんです。彰子先輩……。いえ、彰子さん。」

彰子のはつとして顔を上げる。すがりつくような切なくて苦しそうな目で彰子は一之瀬を見つめてくる。一之瀬は優しく愛しむような目で見つめ返すと彰子をゆっくりと抱き寄せた。一之瀬の胸に頬をうずめた彰子は身動きせずに視線はどこか一点を見つめている。じつと何かを考えているようだった。

「……。あの時……。私が……。恭二を呼び止めたの。あの日、些細なことで喧嘩して……。私がつまらない意地を張ったばかりに……。恭二は優しいから怒ってなくて……。私をなだめようとしていたの。でも、私は意地を張り通してしまって……。恭二がしかたないからって帰ろうとしたから、私、恭二がいなくなること急に不安を感じて恭二に謝ろうって、道路を渡ろうとした

恭二を呼び止めたの……。そしたら……。」

彰子が声を押し殺すように嗚咽して涙で声が詰まる。一之瀬は彰子を強く抱きしめ彰子の頭を胸に押し付けて頬を擦りつけると、やさしく髪に唇を押し付けて彰子の頭を大事そうになでつけた。彰子が肩を揺らして声を押し殺して泣いている。

「私の所為なの……。私がつまらない意地を張ったりしななければ……。私が恭二を呼び止めたりしななければ……。恭二はあんなことには……。」

一之瀬はどうにもたまらなくなつて彰子に声をかけた。

「彰子さん、違うよ。あれは事故だったんだ。恭二さんは彰子さんを愛してたからきつとその時呼び止めてくれるのを待ってたはず。ごめんねって言うてくれるのを待ってたはず。事故は起こってしまったけど、彰子さん自分を責めないで。きつと恭二さんは彰子さんの想いをわかってくれてるよ。」

彰子は一之瀬のその言葉に今度は声をあげて泣いた。一之瀬は彰子のすべてを抱え込むように彰子の体を深く強く抱きしめた。

「彰子さん、僕じゃ恭二さんのかわりにあなたを支えることはできませんか？恭二さんを忘れなくてもいい。僕は今の彰子さんのすべてを守りたい。」

彰子が一之瀬の腕の中で涙に濡れる目を見開いて、首を振る。

「そんなんじゃないだめ……。あなたを苦しめる……。あなたは幸せにならなきゃ。」

彰子がまた、目を閉じて涙を流す。その涙を一之瀬が大きな手で優しく拭ってやる。

「俺は彰子さんじゃなくちゃだめなんだ。俺が愛してるのは唯一彰子さんだけなんだ。あなたがいらないなんて考えられない。彰子さん俺を見て。」

彰子の肩をつかんで自分の胸から彰子の体を引き離すと、一之瀬は彰子の顔を覗きこんだ。彰子とはとつさに目を逸らす。

「彰子さん、目を逸らさないで俺を見て。俺は年下だし、仕事だつてなんだつてあなたにはかなわない。けど、俺はあなたを愛することには絶対の自信がある。恭二さんのことだつて忘れなくていいんだ。俺は丸ごとあなたを愛してるよ。俺はずっとあなたの傍にいたいなくなったりしないよ。寂しい思いなんて絶対にさせない。だから、俺のことを弟じゃなくてちゃんと男として見て。」

彰子がビクツとしておそるおそる一之瀬と目を合わせる。二人はじつとしばらく見つめあった。一之瀬はこれまで見たことがないくらいに、大人の男の顔で真剣なまなざしをまつすぐに彰子に向けていた。彰子の胸で心臓の鼓動が早くなる。彰子は大きく目を見開いてじつと一之瀬を見つめていた。一之瀬はひたむきにみつめてくる彰子の頬を両手で包み込むようにやさしく触れると、そつと唇を重ねた。彰子はふいに触れられた一之瀬の唇に一瞬驚いたが、目を閉じてそれを受け入れた。一之瀬はゆっくり唇を離すとじつと優しい愛しむような瞳で彰子を見つめる。そしてもう一度2、3度頬に軽くキスをする、一之瀬は彰子の白くて細い形のいい首筋から鎖骨にかけてのやわらかいなめらかな肌に唇で触れていった。同時に大事そうに彰子の肩と腰に手を回して引き寄せる。そうしてぐつと腕

に力をこめるとしつかりと抱きしめて、もう一度彰子の唇に今度は濃厚に甘いキスをする。とろけるような甘く熱いキスに彰子は瞬間頭が真っ白になった。途端に彰子の体が熱くなる。体の中心から熱が溢れてくるような高揚感に、彰子は思わず眩暈がして、甘い吐息をもらした。一之瀬はジャケットを丁寧に脱がすと、頬から耳にかけてキスをしながらブラウスのボタンをひとつずつはずしていった。白く滑らかな透き通る肌に唇で優しく触れながら、一之瀬は一瞬間を上げて彰子の素のままの姿を改めて眺める。その視線に彰子がはらずかしそつに顔を伏せる。一之瀬は彰子の顎を引き上げてもう一度甘いキスをする、耳元で囁いた。

「彰子さん……。すごく綺麗だ……。愛してる……。」

一之瀬は宝物を扱うかのように大事そつに彰子を愛した。彰子は一之瀬の腕の中でじつと目を閉じて再び涙を流した。

7# (後書き)

あと、3話です。

ここまで読んでくださってありがとうございます。もう少ないので最後までお付き合いください。m (——) m

翌朝一之瀬が目を覚ますと、彰子の姿はなかった。リビングにいくとテーブルの上にメモがあった。

『ありがとう。 彰子』

一之瀬はその意味をどうとっていいのかわからずに困惑した。

あれ以来、3日間彰子は会社を休んでいる。一之瀬はホワイトボードの名村の青いプレートに時折目をやりながら、ため息をついた。携帯に電話しても、コールはするが電話にはでない。メールをいれても返信もなかった。

一之瀬は中本と営業に出ている。中本はこここのところ雰囲気が変わって少しずつだが、営業の担当者らしく変わってきていた。一之瀬は彰子にアドバイスをもらってからとことん中本と話をした。中本はもともと無表情なタイプで表現力に乏しい。それを克服したいと思って仕事は営業を選んだのだと言った。それでも、一之瀬についてまわってその仕事ぶりを見て、どんどん自信がなくなっていくたようだった。そうすると夜も寝られず、課題で出されたこともPCに向かうと頭が真っ白になってしまつて、毎日ならめつこするだけで時間は過ぎてしまった。どこがわからないとか、一之瀬がいるいる聞いてくれても答えることが出来なかったのだ。最近は本当にやめようと思っていたと、やっと正直な気持ちを一之瀬に告白した。

一之瀬は中本の思いには一度も気付いたことがなかった。何を言っても反応が薄い中本をやる気がないとばかり思っていた。結局自分の仕事のやり方を中本に押し付けていただけじゃないかと思うとカウンターパンチを食らったようだった。でも、それで目が覚めた。

その次の日から、技術じゃなくて、相手の心の掴み方や表情の出し方や会話のコツなど、コミュニケーションのとり方を中心に教えていった。そして今日、はじめての中本一人で商談の実践をする。最後の仕上げだった。一之瀬は事前に中本が作ってきた案件の内容と商談の段取りなど、綿密に打ち合わせをした。中本は緊張して顔が青い。

「中本、いいか、失敗を怖がるな。俺がついてる。必ず拾ってやるから、思い切ってやれ。おまえのいいところは丁寧さと内容の正確さだ。今まで見てきた俺の商談を真似るな。おまえは俺とは違う。おまえらしさでいいんだからな。おまえの人柄を売れ。この案件はおまえ自身だ。今のおまえならできる。自信もっていけ。」

そういつと緊張していた中本が驚いたような顔をして幾分赤みが増す。

「はい。」

少し照れくさそうに笑うと中本にしては元気な声で返事をした。

「さあ、行くぞ。」

「はい。先輩。」

そうして商談は何か中本一人でこなし、同行していた一之瀬は挨拶と会話をした程度で出番はなかった。商談の内容はまずまずで、相手も乗り気になってくれた。まだまだ、表情が硬かったり、ぶっきらぼうさはあるものの真面目で丁寧なところが相手に好感を持たせたようだった。帰り道の車の中で運転しながらも中本の晴れ晴れとした表情を見て、一之瀬は彰子の言葉を思い出した。

『難しいけど、人を育てるって面白いわよ。』

今、中本の表情を見てみると本当にそうだと思った。人の成功が自分のことのようにうれしいと感じる自分が不思議でならなかった。今回、中本という後輩に接したことで、人はみんな違う考えや価値観をもっていることは頭でわかっていたはずなのに、自分の物差しでしか人を見られなかった自分に気付かされた。一之瀬は一人前の顔して仕事をやっていたが、まだまだ青二才なんだなと思うと、またひとつ目標ができたようでもんだか仕事が楽しくなってきた。

「中本、今日は上出来だったぞ。緊張してたから少々堅かったが、あちらさんは好印象だったみたいだしな。これで、ひとり立ちだな。」

窓の外を見ていた中本は驚いた顔をして視線を一之瀬に向けると、照れくさそうに輝かしい顔で笑った。

「いい顔してるじゃないか。おまえにもそんな笑顔ができるんだぜ。いい営業になれるよ。」

ちらつと中本の顔を見て一之瀬がうれしそうに言った。

「一之瀬先輩……。俺、一時やめようと本当に思ってたけど、今はやめなくて良かったと思ってます。今日、緊張して、思うようには行かなかったけど、今までのの中では最高の自分だったんです。終わった後、先輩がニッコリ笑ってくれたときには、できないと思っただけで、悩んでた頃が不思議なくらい成長した自分に気がきました。担当してくださったのが一之瀬先輩で本当に良かったと思ってます。」

そういつて中本が隣で頭を下げる。

「おいおい、頭下げるのは俺だよ。おまえの気持ちも考えずに俺は自分のやり方ばかりを押し付けてたんだ。自信なくすのも当然さ。今回は俺もおまえにいろんなことを教えてもらったよ。気がついてやるのがおそくなって、ごめんな。」

一之瀬が申し訳なさそうに中本を見た。

「いえ、とんでもないです。そんな先輩、謝らないでください。」

そして、中本が照れくさそうにもじもじしながら一之瀬に声をかける。

「あの、一之瀬先輩、・・・俺・・・まだまだですけど、一之瀬先輩みたいな営業担当になりたいです。これからもいろいろご指導いただけますか？」

「えっ？俺？」

一之瀬は驚いた。そんなことをまともに面と向かって言われたことは初めてだった。

(彰子さん、これですか・・・。たしかにはまりますよ。)

一之瀬は心の中でそうつぶやいた。一之瀬は同時に今日こそは彰子に会いに行くことを決意した。この3日間は彰子のことを思うと自分ばかりが強引に彰子の心の中にずけずけとはいっていいものなのか、ひどくナーバスになって迷っていた。彰子を傷つけたくない思いで一杯だったのだ。でも、今何かがはじけた。あのとき、すべてを受け入れると行ってたはずなのに、彰子の前で二の足を踏んでいるじゃないか。腫れ物にさわるような扱いをしているじゃない

いか。自分は何をもたもたしていたのだろう。自分がしなくてはいけないことはいつでも傍にいてやることじゃないのか。近くに居る安心感をもたせてやることじゃないのか。そう思うと、いてもたってもいられなかった。

一之瀬がPM6:00に会社に戻ると金曜日なので事務関連の人たちの多くははすでに退社し、会社にはまばらしか人がいなかった。営業系はまだこれから帰社してくるようだった。一之瀬はすばやくルーチンワークをすませると早々に会社を後にした。

彰子の家は電車で15分くらいのところだった。手帳にある住所を頼りになんとか、彰子のマンションを見つけるとの部屋ドアの前に立つ。インターホンを何度か鳴らしたが、留守のようだった。もう一度、携帯に電話してみる。コールはするが、やはりでない。

「くそっ！彰子さんどこいったんだよ。」

泣きそうなくらいの顔をしてつぶやいた。そしてはっと何かを思い出したように会社に電話した。

「お疲れ様です。一之瀬ですけど。三枝さんってもう帰られましたか？・・・え？今出た？すみません、急用なんです。追いかけていただけませんか？」

8# (後書き)

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。あと残り2話です。最後まで是非お付き合ってください。

9 # (前書き)

ありがとうございます。お読みくださいます。

抜けるような青空。以前より日差しもまぶしい。立春といっても曆の上だけだと常々思ったが、外にでるとさすがに着実に春を告げていた。河はどこかの雪解け水を含んでいるのか豊かな水量で穏かに流れていた。ぼつりぼつりと水鳥が、時折、河の中の魚を採るために水面をつついていて。河岸の広場では小学生ぐらいの子供たちがサッカーボールを追いかけて元気よく走り回っていた。

彰子はぶらつとしばらく歩きながらのどかな風景を楽しんだ。この3日間恭二との思い出の場所に足を運んでいる。その最後がここだった。

恭二が住んでいたマンションの近くの河川敷。このあたりでよく恭二は写真を撮っていた。ここから大学までは結構時間がかかる。自宅通学じゃないのになぜこんな遠くから通っているのかと聞くと、恭二は笑って

『ここに集まる鳥が好きなんだ。こいつらの自然なままの綺麗な姿を撮りたいからさ。』

と目を輝かせて言っていたのが、今でも昨日のことのように思い出される。

ここへも恭二が亡くなってから一度も来たことはなかった。恭二と居た場所にこうして再び1人で来るなんて思いもしなかった。つい最近まで、恭二との幸せだった時に触れなくなかったのだ。少しでも触れてしまえば、会いたい思いがつのり、寂しくて寂しくて耐えられなくなりそうだったからだ。この3年・・・恭二が心の奥底にいつも居たのに、ずっと見ないフリをしていた気がする。彰子は乗り越えたはずだと思っていたのに、この現実から逃げていただけで自分はなんにも変わってないことを思い知らされた。今度こそ、

恭二がいらない現実に目を向けないといけな。そうしないと、自分は前に進めない。彰子は思いつきり、息を吸い込んだ。まだ冷たかったが、水際のすがすがしい空気に体の中から生き返る気がした。この空気も匂いもすべてあのときそのままだった。

「よし、大丈夫。」

そうつぶやくときびすを返して、彰子は河に背を向けて歩き出す。そうして、2、3歩あるいてもう一度振り返ってにっこり笑った。彰子が振り返ったのはその一度きりで、もう二度と振り向くことはなかった。

翌日の朝、彰子は静岡県田舎町にあるお寺に現れた。ここは山々の景色に囲まれた自然が美しいところだった。毎年一度は訪れている恭二の墓標の前に立つと、持っていた花を供え、桶の水を墓標にかけた。ろうそくをともし、線香を供えるとじっと彰子は墓標を見つめる。そして、静かに合掌した。

「やっと見つけた。」

聞きなれた声が後ろから響く。彰子が驚いて顔を上げる。

「一之瀬？・・・どうして・・・？」

一之瀬はニッコリ笑っている。

「もう、何も言わずにどっかいつちゅうから心配したんですよ。」

彰子が申し訳なさそうに笑う。

「でも、どうしてここが・・・？」

「彰子さんの考えそうなことはわかります。ダテに2年彰子さんを見てきたわけじゃないですからね。三枝さんを説き伏せてここを教えてもらったんです。お土産買って来いと言われましたよ。」

彰子は三枝が言いそうなことだと噴出した。

「元気そうでよかった・・・。」

一之瀬はほっとしたような顔をした。よくみるとコートの下は仕事のためのスーツだ。

「もしかして、昨日仕事終わってからそのまま来たの？」

「えっ？ああ、どうしても彰子さんに会わなきゃって思ったなら、そのまま新幹線に乗ってた。」

一之瀬が照れくさそうに笑う。

「ええ？じゃあ、朝までどうしてたの？」

彰子が驚いたように目を丸くしてたずねてくる。

「そのまま来たから泊まるどころも考えてないし、駅で朝まで仮眠してましたよ。」

彰子があきれたようにクスクス笑った。一之瀬が照れたようにふくれっ面をする。

「しょうがないでしょ？だまってどこかに行ってしまった誰かさんを探しに行くのに必死だったんですから。」

「ごめんごめん。」

彰子は笑いながら誤る。彰子はそんなにまでして一途な思いを自分に向けてくれる一之瀬がひどくいじらしくかわいく思えて、彰子の笑いを誘う。

「もう、なんで連絡くれなかったんですか。俺、彰子さんの姿が見えないんでほんと気が気じゃなかったんですから。」

一之瀬は綺麗な顔の眉間にしわをよせて訴える。一瞬空気がかわって彰子が真顔になる。

「ごめんなさい。どうしても言えなかった……。1人になりたかったの。1人になってもう一度恭二のいない現実に向きあわなきゃって思った。3年前から私何も変わってなかったのよ。恭二がずっと心の中にいるクセに見ないふりをしてきた。この前、それに気がついたので。」

彰子はじつと恭二の墓標を見つめる。

「このままではいけないって思った。私は一生このまま現実から逃げたままでいいのかって……。このままじゃ前に進めないよ。」

彰子の目から涙がこぼれた。一之瀬がとっさに彰子に触れようと手を差し伸べようとするのを彰子は手で制した。

「待って、最後まで聞いて。」

彰子は涙を拭いて小さく息をして呼吸を整えた。

「私ね、休んでた間にね、恭二と過ごした思い出の場所に行ってみたの。以前だったら考えられなかった。恭二と過ごした場所に自分ひとりで行くなんて。でも、行かなきゃって思った。そしているんなところで恭二に会ってきた。もっとね、泣けるかと思ったたらね、なんだかうれしかった。そしたら恭二がいない事実をはじめて受け入れられた気がしたの。そして、ここが最後。」

そう言うといつも凛々しい聡明な彰子の顔に戻って一之瀬の目を見た。

「ここへはね、あなたのことを恭二に許してもらおうと話をつけにきたのよ。私、一之瀬のこと好きよ。こんならつても年上で偉そうな女だけと本当にいいのかしら？」

一之瀬は呆然としている。彰子はクスクスわらって一之瀬の瞳を見つめていた。

「・・・彰子さん？本当に？」

彰子はコクリと頷いた。

「やった！」

一之瀬は子供のように喜んで彰子に抱きついてきた。

「ちよつと！一之瀬！ここどこだと思ってるのよ！」

彰子は笑いながらはしゃぐ一之瀬をいつもの調子で叱りつける。一之瀬は彰子を抱いたまま恭二の墓標の前に立つと急に真面目な顔になる。じつと墓標を見つめる。

「恭二さん、俺、あなたを好きになった彰子さんだから好きになったんです。俺、絶対幸せにしますから、どうか見守ってください。」

そういつて目を閉じて合掌した。彰子は驚いて目を見開いたが、その瞬間うれしくて涙がこみ上げてきた。じつと目を閉じていた一之瀬がふと目を開けて彰子をみると彰子の目から大粒の涙が流れていた。一之瀬はふつと優しく微笑んで彰子の肩を抱き寄せた。一之瀬はいつも暖かくやさしい。彰子は一之瀬に体を預けた。それに気付いて一之瀬がやさしく目を細める。

「彰子さん、ここんとこ泣いてばかりですね。」

彰子は一之瀬の胸を軽く叩いて訴えた。

「今のはあなたが泣かしたんでしょうが。」

「え？俺？俺は幸せにするとは言いましたけど泣かせるなんて言うてませんよ。恭二さんにならまれますから、泣き止んでくださいよ。」

そういつて困ったように笑うと彰子も一之瀬の胸に顔をうずめたまま声をたてて笑った。

その日の午後、春一番が暴れん坊のように冬の寒さに冷え切った日本列島に暖かい空気を吹きこんだ。気温は暖かいのに風の強さに人々はこぞって春の肌寒さに震え上がった。そうして、今年も春が

や
っ
て
来
た
。

9 # (後書き)

ありがとうございました。

ほとんどエンディングです。

次回はエピソード。最終話です。

是非最後までよろしくお願いします。

m
—
(
m

10# (前書き)

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。いよいよ最終話です。

エピソード

―それから3カ月後―

「ちょっと！一之瀬！起きなさいよ！会社遅れるってば！」

既に支度が出来上がっている彰子が一之瀬を揺り起こしている。

「ううん……、もうちょっと……。」

「だめよ、遅刻するわ！」

「彰子さんが早すぎなんだって……。」

「起きなさい！」

彰子は厳しく命令口調で言う。

「嫌だ。航くんって言うてくれたら起きてもいい。」

「あのねえ……。」

彰子は脱力した。こいつこんなに甘えっこだったのか、と絶句しつつも苦笑いする。軽くため息をついて呼吸を整えた。

「航くん、起きてくれるかな。」

彰子が顔を近づけて耳の傍で囁いた。一之瀬はぱっと目を開けて彰子の腕をぐいっと引っ張った。

「あつ！ちよつと！」

その反動でよろけて一之瀬の体の上に乗り上げる格好になった。一之瀬はすかさず抱きしめて彰子の唇に軽くキスをする。

「いただきっ！やっと呼んでくれた。」

いたずらっぽく一之瀬がうれしそうに笑う。彰子は真っ赤になっている。

「彰子さんかわいい。このまま、会社に行くのがもったいないな。ずっと彰子さんを抱いていたい。」

パチっ！不意に彰子の張り手が一之瀬の額にヒットする。

「いてっ！」

その瞬間、彰子は一之瀬の腕をすり抜けて立ち上がる。

「なに馬鹿なこといつてんのよ。早く支度しなさい。朝食出来てるわよ。」

そういうとスタスタ歩いてダイニングのほうに行ってしまった。

「ちえっ！マジなのに俺。」

一之瀬はしかめっ面してばやきながらしぶしぶ身体を起こして着替え始めた。彰子は幸せそうな顔してダイニングテーブルでコーヒを二人分のカップに注いでいた。

その日、会社に着くなり、二人して支店長のところに挨拶に行くと、午後には会社中の知るところとなった。

昼休みの休憩室は、いつになく彰子と一之瀬の話題で盛り上がっていた。

「ねえ、名村主任、一之瀬君と結婚するらしいわよ。聞いた？」

営業1課と2課の女の子達が集まって井戸端会議をしている。

「え〜っ？本当？名村主任は安全パイでてつきり姉弟の関係だと思ってたのに！ショック！」

「名村主任もやっぱり女だったってことよね〜。年齢的にも切羽詰って一之瀬さんを追い詰めたんじゃない？」

西倉絵梨が綺麗な顔を意地悪そうに歪ませて嫌味っぽく言った。

「それが、ちがうらしいわよ。話によると、一之瀬くんがベタ惚れで名村主任を口説き落としたりらしいわよ。」

西倉が驚いた顔をした。

休憩室でそんな話題が飛ぶ中、ピーチクパーチクあることないこと

噂をする女の子達を三枝は1人覚めた目で見ていた。

「玲子。」

その声に井戸端会議隊は急に黙り込む。

「ああ、彰子。あんたたちエライ噂になってるわよ。」

「え？ああ、いいのよ。隠すことでもないし。」

三枝は苦笑いした。

「これだから幸せもんと話するの嫌なのよね。」

三枝はわざと迷惑な顔をして笑う。

「でも、彰子から電話もらったときには本当自分のことのようにうれしかったわ。」

「玲子のおかげよ。恭二のお墓にまさか航が現れるなんて思ってもいなかったもの。式にはいい席を用意するわね。」

「はいはい。お礼に私にも若くていい男紹介しろって一之瀬に言っ
といてね。」

「はいはい。かしこまりました。」

そういつて噴出して二人で笑った。

彰子がロッカーに荷物を取りに入ると、彰子のロッカーの前に西倉

が立っていた。

「西倉さん？」

西倉は彰子に近づいてくると、深々と頭を下げた。

「名村主任、申し訳ございません。」

突然のことに彰子はびっくりした。西倉はプライドの高さでは有名で仕事以外で人にこんなにも頭を下げるなんて考えられなかった。

「どうしたの？急に？」

西倉は頭をさげたまま話を続けた。

「私なんです。名村主任に嫌がらせしたの……。」

「えっ？」

彰子は絶句した。

「私、一之瀬さんのこと好きだったから、悔しくて……。主任、次の日からしばらく休んでたみたいだし……。きつとひどく傷つけてしまったんですよね。私……。主任が一之瀬さんを振り回してるんだとばかり思っていました。」

彰子はしばらく呆然としていたが、ふつと微笑んだ。

「西倉さん、頭を上げて。」

「そんな、私とんでもないことして……。」

西倉が涙声になる。

「あの……写真の人……、どなたですか？」

西倉が涙で濡れた目で見つめてくる。彰子は少しためらったが、西倉をまつすぐに見て言った。

「3年前に事故で亡くなった婚約者よ。」

西倉がはっとする。次の瞬間顔をゆがめた。

「すみません……、すみません……、私なんてこと！」

西倉が嗚咽して泣き崩れてうなだれる。彰子がかがんで西倉の肩を両手で起した。

「もう、いいのよ。それにあんなことがなければ私は未だに進めなかつたわ。そりゃあ、あの時はショックだったわ。でもね、今は感謝よ。3年前のまま私は時計が止まっていたの。あのことでそれに気付かされたわ。そして自分とやっと向き合うことができたのだから、もう、気にしないで。謝ってくれただけで十分よ。あなたがやったって言わなければ気付かずに済んだのに、こうして正直に話してくれたわ。本当、それだけで十分よ。」

西倉が涙目で彰子を見上げた。

「本当に申し訳ございませんでした。……一之瀬さんとお幸せに。」

西倉は顔を真っ赤にしながらも一生懸命言葉を振り絞った。そしてもう一度深々と一礼すると走って出て行った。彰子はロツカールムの扉を見ながら軽いため息をつくとやんわり笑った。

― 結婚式 ―

花嫁の控え室の前で一之瀬はそわそわうつろうつろしている。

ガチャツッ！

扉が開く音がして息を呑む。

「なんだ、三枝さんかあ。」

一之瀬ががっくり肩を落とす。

「ちょっと、なんだとは何よ。恩人に向かって！」

「ああ、すみません、その節は……。」

一之瀬は営業用の愛想笑いを三枝に振りまく。

「あゝ、はいつていいですか？」

むっとしている三枝にやや上目遣いで恐る恐る尋ねた。

「ダメっ！もう少し大人しく待ってなさいよ。ほんと子供なんだから。」

一之瀬は三枝にしかられるとシユンとする。その様子に三枝は噴出す。

「あははは。彰子があんたをいじるのが好きなのはわかる気がするわ。ほんと子供なんだから。いいわよ。入って。待たせたわね。」

一之瀬の顔が急にはあと華やいだ。三枝はクスクス笑いながら扉に手をかけようとしている一之瀬の背中に釘を刺した。

「あ、いくら綺麗だからって変なことしちゃだめよ。今更直してる時間ないんだからね！」

三枝の言葉にドキツとして一瞬ひるんで赤くなる。

「なんつーことを！」

一之瀬は半身後ろを振り返って三枝に一言言つと、どきどきしながら扉を開いて中に入った。

「玲子？ちょっとそのバックとってくれる？」

彰子は物音に三枝だと思い、声をかけるが返事がない。変に思っただアのほうに振り返った。

そこには雑誌から飛び出てきたようにかっこよく笑う深いグレーのタキシードの紳士が立っていた。彰子はその姿を見てどきっとして

一瞬黙り込む。

「彰子さん……。すごいよ……。綺麗だ……。」

一之瀬は目を輝かせながら頬を赤らめて彰子に見とれている。彰子は純白のドレスにつつまれて白く抜けるような肌にはんりの赤みがさしてこれまで見たことがないような清らかで艶めかしい美しさをかもし出していた。一之瀬はうっとり眺めるところわれものにふれるようにそおつと彰子を抱きしめた。触れてくる一之瀬の手から、体にこもった熱が伝わってくる。途端に彰子も鼓動が早くなる。互いの鼓動が共鳴してひとつになったみたい体に響きわたり、いつの間にか周りの音がすべて聞こえなくなった。

「まずいよ、俺、みんなの前に出したくなってきた。こんなの見せるのもつたいない。」

まじめに一之瀬が子供みたいに我儘を言い始める。

「航？何馬鹿なこと言ってるの？」

一瞬モデルのように美しいエレガントな紳士に見えたのに、中身はいつもの一之瀬だ。この男は子供なんだか大人なんだか本当に計り知れない。彰子はクスクス笑った。

「ちょっと！その二人！いつまでお熱く抱き合ってるのよお。時間よ！」

三枝が渋い顔してテレながらまくしたてると二人がぱつと手を離れた。その瞬間、二人で真っ赤になって笑い転げた。

愛の讃歌 (コリント十三章)

愛は寛容であり、愛は親切です。

また人をねたみません。愛は自慢せず、

高慢になりません。礼儀に反することをせず、

自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を

思わず、不正を言はずに真理を喜びます。

すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、

すべてを耐え忍びます。

愛は決して絶えることはありません。

一之瀬と彰子がじつと互いの目を見つめる。一之瀬の瞳に彰子が、
彰子の瞳に一之瀬が映っている。それぞれの慈しみの想いをこめて
互いの愛を誓う。

その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのと
きも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、こ
れを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓い

ますか。

「誓います。」

アーメン

〓
FIN
〓

10# (後書き)

ありがとうございました。いかがでしたでしょうか。是非感想等お聞かせてください。

読んでくださった皆様本当に感謝です。

これからも、がんばります。よろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4856b/>

春一番が吹く頃

2010年10月11日17時49分発行